

企業名： 松田産業

1. この会社が目指す姿が理解できるか

理解しづらかった。松田産業は「限りある地球資源を有効活用し、業を通じて社会に貢献する」ことを企業理念とし、「松田産業が循環型ビジネスのノウハウを一層向上させ、持続可能な成長を目指す」ことを目標としていると松田産業レポート 2021 は記しているが、この企業理念を実行し続けることで松田産業がどのような会社になっていく（なりたい）のかということは記されていなかった。また、目標を達成するためにどのような事業を行っているのかということしか書かれていなく、肝心の『なぜこの目標を設定し、この目標を達成した時にはどのような会社になっているのか。』ということが書かれていなかった。自社の功績を述べているだけで、本来なら記すべきである「どのような会社にしていきたいのか」ということが曖昧な記述で終わっているように思われる。

2. この会社の競争優位性が理解できるか

理解しやすかった。理由は明白で、松田産業が主軸として行っている貴金属関連事業：食品関連事業のそれぞれの項目で、松田産業の貢献が記されているからである。貴金属関連事業では、半導体や電子部品を製造する過程で規格外となった部品（スペックアウト品）などを国内外のメーカーから集荷し、そこに含まれる貴金属を回収してリサイクルする事業によって、限りある地球資源の有効活用を促進している。そのことにより、地球環境の保全と循環型社会の構築に貢献している。食品関連事業は、新興国の食糧需要の増大、食糧価格の国際的な上昇、災害時の物資の不足、食糧衛生に関する事件などから、「安全・安心な食材を安定供給する」という使命の重みを自覚し、事業を推進している。また、納品前の加工作業で材料ロスの軽減に務めることで貴金属関連事業と同様に「資源の有効活用」に努めている。また、これらの競争優位性の一層の向上のため、様々な具体的目標を立てており、理解しやすかった。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

とても理解しやすかった。競争優位性を持続させるために行なっていることを4つのセクション（1. マネジメント体制 2. 環境管理 3. 品質管理・安全管理 4. 人材育成）に分けて説明しており、一つ一つのセクションで、どのようなアプローチによって競争優位性に持続性を持たせようとしているのかということが明確に書いてある。マネジメント体制ではコーポレート・ガバナンス体制や事業活動と社会活動の全ての指針となる社内基準「松田産業グループ グローバル行動規範」の制定による内部統制によって、環境管理では環境パフォーマンスや法律の遵守によって、品質管理・安全管理では保証体制や機密保持体制、労働安全衛生によって、人材育成では人間尊重経営によって競争優位性を持続させてい

る。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

達成できないと思う。松田産業は第二次世界大戦後に、食品系統の会社として設立し、貴金属業も同時に発展する中で、2001年に東証一部に上場している。その後、じわじわと海外進出(ほとんどがアジア)をしている。正直にいうと、会社に勢いが無い。売上高は2,722億円と多いが、そのほとんどが昔かある仕事であり、技術革新による世界の変化に対応しているものはあまりない。自身の人的資本の価値向上が達成できるのは、今後の急速に変化する世界に対応できるような会社に勤めている時であり、現段階で松田産業はそのような会社ではないと考える。

5. 報告書にはどのような改善余地があるか

松田産業の報告書は大変理解しやすかった。しかし、グラフや表や図などを多様に用いているため、ほとんどの箇所で抽象的な説明になっており、細かく自社の分析を行なっている箇所はあまりなかったように思われる。また、1番でも記した通り松田産業の長所を記すことに重きを置きすぎており、短所を分析し、それを改善する方法などは書かれていなかった。

よって、この報告書には自社の短所を分析・改善し、自社の進むべき方向性を記す。全体的により具体的な記述を多くする。という2点の改善点があると思う。